

村野藤吾の都市への眼差し

本学美術工芸資料館に収蔵されている建築家・村野藤吾（1891～1984年）の設計図面を紹介する展覧会が始まったのは、2000年11月のことである。その当初から、建築の設計原図という資料の特殊性もあって、設計の実務経験を有する学外の関係者にも協力を仰ぎ、学内の建築史を専門とする教員を交えて、「村野藤吾の設計研究会」が組織され、それが展覧会の企画母体となってきた。毎年、地道な図面の整理作業を進める中からテーマを設定し、現存する建物については調査を行い、資料を発掘するなど、展覧会をひとつのきっかけとして、村野藤吾の建築思想の全体像に迫るべく、現在に至るまで活動を続けている。

その間、「村野藤吾・晩年の境地」をテーマとした2007年の第9回展までは、おおむね時代を追う経年的な形で、村野の仕事を順次紹介してきた。また、翌年の2008年の第10回展

では、「アンビルト・ムラノ」というテーマを設定し、さまざまな理由から図面は描かれたものの実現しなかった建築ばかり18件を取り上げた。さらに、別の建築展の企画を挟んで、昨年の2012年に開催した第11回展では、新たに発見された未公開資料を元に、歴史の空白を埋めるべく、「新出資料に見る村野藤吾の世界」をテーマとして掲げた。

そして、第12回となる今年の展覧会では、これまでの経年的な方法を離れて、より深く村野藤吾の建築思想の特質を検証して紹介することを目指して、「都市を形づくる村野藤吾のファサードデザイン」というテーマを掲げることにしたのである。このテーマの設定には、次のような意図が託されている。

すなわち、村野藤吾の建築家としての仕事を振り返るとき、その主軸をなすものの一つに、都市の街角の表情を形づくる建物として、オフィスビルや銀行、商業ビルや百貨店、劇場や映画館といった一連の作品群があることに気がつくられる。それらの建物は、その街のランドマーク的な存在として長い時間にわたって人々に親しまれてきたものばかりである。おそらく、村野ほど、仮に「都市建築」とでも呼べる作品群を生涯にわたって持続的に作り続けた建築家は日本にはいないだろう。そう考えると、とかく村野作品として注目されがちな美術館や教会、ホテルといった記念碑的で芸術性の高い個性的な建築以上に、これらの都市建築にこそ、彼の建築思想を理解する貴重な手がかりが読み取れるのではないか。また、ほかの建築家たちとは大きく異なる村野独自のデザインが施された建物は、独特な雰囲気

を周囲の街並みに醸し

出してきたことにも注目する必要がある。その特徴は、繊細な素材の選択とディテールの処理から生み出された建物の外観立面（＝ファサード）の陰影に富む表情の豊かさ、形態操作とでもいえる建物の塊（＝ヴォリューム）の組合せ方の妙味に見て取ることができる。こうして、現在では、いずれの建物も、それとは気づきにくいものの、高い芸術性をもつかけがえない都市の建築遺産となっている。

けれども、大変残念なことに、近年の激しい都市再開発の影響もあって、私たちの目の前には、こうした高い価値をもつ村野の建築が次々と取り壊しの危機を迎えている現実がある。すでに、初期の代表作として有名だったそごう大阪本店（1933年）や、戦後の大作の一つである新ダイビル（1958・

63年）などが取り壊されて姿を消し、大阪新歌舞伎座（1958年）も、現在閉鎖されたままの状態になっている。

こうした中、あらためて村野が都市に何をもちたのか、その独自のファサードデザインと形態操作にどのような意図が込められていたのか、を確認することは、建築が都市に何をできるのか、良好な都市景観はどのようにすれば守り育てることが可能なのか、など、建築と都市の明日を考える上での貴重な手がかりを与えてくれるに違いない。そこで、今回の展覧会では、独立後のデビュー作である森五商店東京支店（1931年）から、戦後の代表作の日本生命日比谷ビル（1963年）を経て、村野の晩年83歳の大作である日本興業銀行本店（1974年）に至るまで、さらには、彼自身のアトリエであった2か所の事務所など、村野藤吾が都市の中で試みた大小21件の建築を取り上げて、端正で格調の高いデザインに込められた建築思想のありかを今一度確かめてみたいと思ったのである。

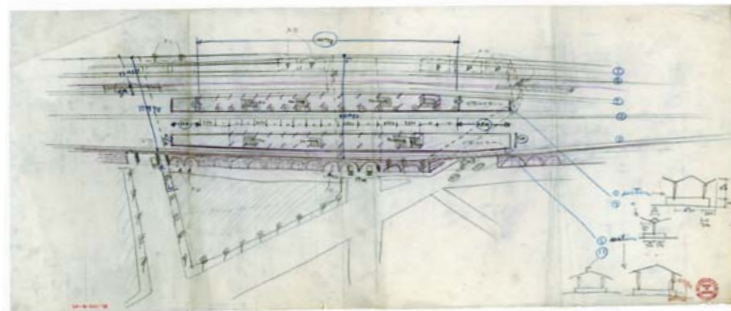
また、例年どおり、取り上げた建築の中で、大阪、岡山、東京に現存する17件については、本学教員の市川靖史（デザイン科学専攻大学院助教）が新規の撮り下ろしを行い、その魅力を大判の写真で伝えると共に、建物の現状記録の意味も込めている。さらに、造形工学課程の3回生の学部学生11名には、設計原図を元に展示用の精巧な紙製の模型11基を制作してもらうことによって、建築展をより分かりやすいものにする試みも継続した。それは、同時に、建築の設計を志す学生たちにとって、村野藤吾の建築を通して建築設計の神髄を体感する貴重な機会にもなっている。

さて、ここに紹介するのは、東京の有楽町駅前に多目的ホールと百貨店の複合建築として建てられた読売会館・そごう東京店（現・ビックカメラ有楽町店、1957年）の図面である。但し、建物の設計図そのものではない。いずれも、この建物の建設敷地の条件を設計のスタッフが調査した際の参考図面と思われる。建築の設計図は、当然のことながら、建物を建設するために必要な工事発注のために作成される。だから、それらは、通常公開されることはない。逆に言えば、そこ

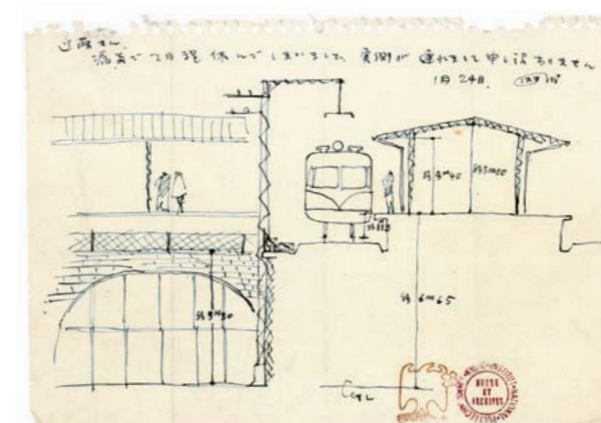
には、建築家が何を調査し、何をテーマとして設計を進めた

のか、完成した建物を設計するにあたって、駅のホームからどう見えるのか、人はどこからこの建物を見るのか、どういうルートで訪れるのか、など、あらゆる角度から建物のデザインを検討したであろう様子が見えてくる。巨匠と呼ばれることも多い村野藤吾だが、彼が実直なまでにこのような指示を出し、その建物が地道なプロセスの積み上げによって生み出されたものであることを今に伝える。ここにも、村野の都市への眼差しを読み取ることができるし、その眼差しから現代の都市を考えることも可能だと思う。図面資料のもつ意味と面白さは尽きることがない。

美術工芸資料館教授 松隈 洋



敷地と有楽町駅の調査メモ、手前の斜線を引いた三角形が敷地（IV-08-E-03）



有楽町駅の高架とプラットフォームの断面実測調査メモ（IV-08-E-02）